

『文章読本』に見る谷崎潤一郎の言語観・日本語観

江 藤 裕 之

【要 旨】 谷崎潤一郎（1886-1965）の『文章読本』（1934）は、谷崎の言語観・日本語観を知る上では不可欠の資料である。そこには、『文章読本』という書名から予測される論文マニュアルに見るような文章作成上の細かなルールはなく、谷崎の言語観を基底に据えた文章論が展開されている。その言語観を分析すると、谷崎は言語を単なる意志伝達の道具とはせず思考の手段ととらえ、そこから国語の特性と国民性の不可分性を主張している。これは、言語構造はそれを話す人々の精神に影響を及ぼすというHumboldt的言語観に連なるものである。さらに、日本語の特質を踏まえたうえで日本語による思想を正確に伝えるためにはいかにすべきか側面が強調されている。このような点から、『文章読本』に見る谷崎の言語論・日本語論は、言語を研究の対象とする研究者のそれではなく、まさに言葉を使って芸術を創作する文学者の芸術的言語論と見ることができる。

【キーワード】 谷崎潤一郎、『文章読本』、文章論、芸術的言語論、Wilhelm von Humboldt

谷崎潤一郎（1886-1965）といえ、『痴人の愛』、『春琴抄』、『細雪』などの小説や、随筆『陰翳礼讃』、そして『源氏物語』の現代語訳などの作品によってその名が知られ、「大谷崎」の異名が示すように戦前・戦中から戦後にかけて文壇の重鎮であった。そして、味わい深い文章を書く一方で、文章の読みやすさ、完全・明晰な文章を書くことでは定評がある。

この谷崎に『文章読本』という名著がある。これは、谷崎流の文章の書き方、味わい方を記した書物であるが、本文からはその主張の背景にある谷崎の言語論、日本語論、さらにその日本語論を敷衍した日本人論をもうかがい知ることができる。言い換えれば、そこには言語を研究対象として分析する学者の言語論ではなく、言語と共に生き、言語を用いて創作活動を行う文人谷崎潤一郎の言語観・日本語観、そしてそれを支える日本人観が余すところなく観察されるのである。

本稿では、『文章読本』において、谷崎の言語観・日本語観が特に顕著に出ていると考える第一章「文章とは何か」を吟味し、その記述内容の特質を考察し、

それが言語学史的視点から観てどのような言語観に類型化されるかを考えてみたい。

谷崎の『文章読本』について

『文章読本』は1934（昭和9）年に中央公論社より出版された。谷崎の年譜によれば、『文章読本』は関西に移住した後すぐの作品であり、『源氏物語』の現代語訳を開始する少し前のことである。谷崎はその初期においては耽美的・悪魔主義的な作風を示したが、関西移住後は古典文学に回帰し、伝統的日本美を源泉とした芸術性が高く物語性の豊かな世界を築いたと言われる。ということは、『文章読本』は谷崎の作風が変わる過渡期、すなわち、谷崎が日本的なるものに強い意識を注ぎ始める時期に書かれたものだと言ってよい。

『文章読本』という題名の書物は谷崎以外にも少なからず存在する（例えば、三島由紀夫、1959；中村真一郎、1975；丸谷才一、1977；井上ひさし、1984；向井敏、1988）。しかし、谷崎のものは一連の著作にお

ける嚆矢というだけではなく（幸田露伴に『普通文章論』[1908]がある）、類書に比べると、抜群の読みやすさ、読者に訴えてくるものの多さとその強さについては他の追従を許さない印象がある。その理由は、おそらく、谷崎が奇を衒うことなく、日本語という言葉をつかって芸術創作を行うものの視点から、常日頃思いついたことを素直に述べているからであろう。飾り気のない文章には、谷崎の強い思いが込められている。それゆえに、読むものに強く伝わる何かが、他の著者による文章読本に比べて多いのではないだろうか。

谷崎の『文章読本』には、その標題から予測されるような細かな規範的ルールの羅列、すなわち「論文作成マニュアル」的な要素はない。まず、谷崎の言語観から始まり、言語を文字で表現する文章の特性などが詳細に説明されている。続いて、文章上達のポイント——用語・調子・文体・体裁・品格・含蓄——を挙げ、それぞれの項目について文学作品からの具体例を示しながら解説している。概観するに、同書は「文章とはそもそも何ぞや」という言語論（日本語論）から見た文章論が中心となっており、文章を書くためのみならず、文章を味わい、日本語、そして日本人をよりよく知るためにも大いに参考になる一書といえよう。

谷崎の言語観・日本語観

——『文章読本』第一章「文章とは何か」から——

谷崎の言語観・日本語観について、それが最も顕著に現れている『文章読本』の第一章「文章とは何か」の内容を吟味していこう（以下の引用箇所につけたカッコ内の数字は谷崎『文章読本』中公文庫版[1975]のページ数を示す。なお、初版は、旧漢字、旧仮名遣いを使用しているが、引用では文庫版の標記のままとした）。本章では、谷崎による第一章の項目分けにしたがい、「言語と文章」、「実用的な文章と藝術的な文章」、「現代文と古典文」、「西洋の文章と日本の文章」の5つのテーマについて、その記述内容を順に見ていく。

1. 言語と文章

『文章読本』では冒頭の「言語と文章」から「言語とは何か」というテーマについて論じられている。こ

のことは、『文章読本』が単に文章を書くためのマニュアル集ではなく、言語論の印象を強く与える理由のひとつである。

まず、谷崎は「やゝ細かい思想を明瞭に伝えようとするれば、言語に依る外はありません」（17）と述べ、言語を意志や思想を伝達するための道具とみなす考えを披露している。もとより、意志や思想といった人間の内面にあるものを伝達する方法には音、映像、身振りなどさまざまな手段があるが、言語でしか伝えることのできないものもある。それは、谷崎が言うような「やゝ細かい思想」であり、言語なくしては、その伝達は不可能である。

このように、言語は意志伝達のひとつの手段であり、確かに言語を特徴づける一側面であることには違いない。しかし、「言語＝意志伝達の手段」と片づけてしまうのは短絡的である。さすがに谷崎は、その愚を犯すことなく、言語を「意志伝達の道具」としてのみならず、「思考の道具」としてもとらえている。それは、人間がひとりでものを考えるときには、言語を発することはなくとも頭の中で言語を使っているという谷崎の主張からも明白である。

谷崎によれば、思考・思惟の道具としての言語は「思想を伝達する機関であると同時に、思想に一つの形態を与える、纏まりをつける、と云う働きを持って」（18）いるのである。しかし、同時に「思想に纏まりをつけると云う働きがある一面に、思想を一定の型に入れてしまうと云う欠点」（19）が生ずるといふ。いずれにしても、こういった視点は谷崎が言語を「思想の鑄型」とみなしていることの証左である。

このように、言語と思考の不可分性を主張する言語理論としては、Wilhelm von Humboldt (1767-1835) の系譜を継ぐ言語学、ドイツロマン派や新カント派の流れを汲むドイツ系の言語学・文献学派、さらには、アメリカ先住民の言語研究から人間の経験や思考様式がその言語習慣によって規定されているという主張にいたった「サピア・ウォーフの仮説」に代表される言語相対論などが有名である (Robins, 1997; 渡部, 1973)。そのいずれも、言語の研究から人間の考察を切り離すことのなかった学派である。しかし、「サピア・ウォーフの仮説」という呼称に象徴されるように、言語と思

考の相関性を主張する学説は必ずしも科学的——自然科学的という意味で——な言語理論として認知されていない。

谷崎が言語を「思考を映しだす鏡」ととらえ、言語によって思想にひとつの形態が与えられる——言語が異なれば必ずと思考形式も異なるとするHumboldt的な言語観 (Humboldt, 1836) の中心をなす考え——と主張する理由は、谷崎が「科学的」なアプローチから言語の考察を行ったのではなく、芸術家の直観から思弁的に言語の本質を考え抜いたことにある。その時、谷崎は、言語と人間、言語と思考を切り離すことをしなかった。その背景に、彼が日本語を用いて芸術活動を推進する文学者であったという点が見逃せない。

さらに、谷崎は、言語による伝達の有効性を指摘しながらも、同時に言語による伝達の限界をも認めている。例えば、「言語は非常に便利なものではありますが、しかし人間が心に思っていることなら何でも言語で現せる、言語を以て表白出来ない思想や感情はない、という風に考えたら間違いであります」(18-19)、「言語は万能なものでないこと、その働きは不自由であり、時には有害なものであることを、忘れてはならないのであります」(20)などと主張している。この裏には、谷崎が身をもって臨んだ文学という言語による表現芸術に対する苦勞がうかがえる。

面白いことに、谷崎は「言語」と「文章」を同一視している。言語を口で話す代わりに文字で書き示したものが文章であるから、「言語と文章とはもともと同じものでありまして」(20)と言い、さらに「『言語』と云う中に『文章』を含めることもあります」(20)とまで主張する。これは実に興味深い主張である。というのも、言語学者——とりわけ、言語学を自然科学的な科学と見なす言語学者——においては、言語を音声と見なし、音声こそ言語であり、文字言語は二次的・付随的なものに過ぎないとする立場が優勢だからである。

さらに、谷崎は、「同じ言葉でも既に文字で書かれる以上は、口で話されるものとは自然に違って来ないはずはありません」(20)、加えて「口で話す方は、その場で感動させることを主眼としますが、文章の方はなるだけその感銘が長く記憶されるように書きます。従っ

て、口でしゃべる術と文章を綴る術とは、それぞれ別の才能に属するのでありまして、話の上手な人が必ず文章が巧いと云う訳には行きません」(21)と述べ、音声言語(口語)と文章語の差異に言及している。こういった主張は、ソクラテスの対話篇や『聖書』に代表されるような話し言葉を言語表現の中心にすえた西洋文化圏の視点とは対照的であろう。つまり、「話すことがその人間の全て」といった西洋人の考え方に対し、むしろ、黙っていることの方により深みがあるとするような日本的な見方を述べているとも解釈することができる。

2. 実用的な文章と藝術的な文章

つづく「実用的な文章と藝術的な文章」の項では、文章における実用性と芸術性が取り上げられており、文章においては実用と芸術の区別は存在しないという点が主張されている。

谷崎は「文章に実用的と芸術的との区別はないとおもいます。文章の要は何かと云えば、自分の心の中にあること、自分の云いたいと思うことを、出来るだけその通りに、かつ明瞭に伝えることにあるのでありまして[...]」(21)と述べ、「最も実用的なものが、最もすぐれた文章であります」(21-22)と結論づけている。これは、まさに芸術家の謂いであって、すぐれた実用品は極めて芸術性が高いという芸術家の発想に由来するのである。

不必要に飾り立てることが芸術であるというのは誤った考えであるとの主張から、谷崎は「分からせるように書く」と云う一事で、文章の役目は手一杯なのであります」(25)と言う。そして、芸術は日常とかけ離れて存在するものではなく、生活に密着しているがゆえに、文章の芸術である「小説に使う文章こそ最も実際に即したものでなければなりません」(25)となる。すなわち、韻文などにおいては、視覚や聴覚への影響も重要な要素ではあるが、口語文を用いる文章では、まず相手に分からせる、つまり、読み手に正確に内容が伝わる文章こそが実用的でありかつ芸術的であるのだ。要は、「簡単な言葉で明瞭に物を描き出す技術が、実用の文章においても同様に大切」(27)ということになる。

前項の「言語と文章」で見たように、谷崎によれば、言語は思想を伝達する手段であると同時に、思想をまとめる手段でもある。したがって、明晰な思想は明晰な言語によって伝えられなければならない。思いや考えが相手に正確に伝わるということこそ文章の使命であり、それが真の意味での実用である。そして、「最も実用的に書くことと云うことが、即ち芸術的の手腕を要するところ」(28)であり、その意味でどのような分野においても簡にして要を得るといった実用文を書くには、程度の差はあれ、文章作成の技巧を備えることが必要であると結んでいる。文意が明確に伝わる文章を書くことこそが実用的であり、同時にまた芸術的であるということなのだ。

この項で注目すべき点は、文学という言語による芸術活動を行う視点から、つまり、谷崎が「文人」としての視点から文章作法における実用と芸術を同一視していることである。Hegelの「理性的なものは現実的であり、現実的なものは理性的である」という有名な文句をもじって言えば、「実用的なものは芸術的であり、芸術的なものは実用的である」ということになる。巧言令色の類を排し、明瞭な分かりやすい文章を書くことこそがもっとも芸術的な高みに一致するという谷崎の主張は、文章においては読み手に正しく分かってもらおうことを第一としていることの証左である。

3. 現代文と古典文

谷崎は、実用的な文章こそ芸術的な文章であり、読み手に分からせることが文章のめざす究極の目的であると主張するものの、口語体による表現では読み手に「分からせる」ことにも限界があると言う。

そもそも、「口語体の文章ならどんなことでも『分からせる』ように書ける、と云う風に考え」(32)することは間違いであると述べている。しかし、今日では、口で話すように書くことが普通になり、「いかなる微妙な事柄でも語彙を豊富に使いさえすれば表現出来ないことはない」と云う謬想が先入主になり、近頃の人々は無闇に多くの言葉を使う(32)ことで、「人々は争ってそれらの沢山な語彙を駆使し、何事を述べても微に入り細を穿とうとしますので、自然文章が冗長になり、文章体なら一行か二行で済ますところを五行に

も六行にも書く」(32)ようになる。結果として、書く方は懇切丁寧のつもりでも、読む方にとっては冗長に聞こえるだけで何を言っているのかわからないことが多くなる。つまり、相手に分からせようというその思いが、その手法を間違えたためにかえって分かりにくくしているのである。

このように、口語文の欠点は、「表現法の自由で釣られて長たらしくなり、放漫に陥り易いことでありまして、徒らに言葉を積み重ねるために却って意味が酌み取りにくくなりつゝある」(33)ことにある。その対処法は、「この口語体の放漫を引き締め、出来るだけ単純化することにあるのであります。それは結局古典文の精神に復れと云うことに外ならない」(33)ということであり、「文章のコツ、即ち人に『分らせる』ように書く秘訣は、言葉や文字で表現出来ることと出来ないこととの限界を知り、その限界内に止まることが第一」(33)であると谷崎は主張する。

谷崎の言う「古典文」とは、大和言葉を用いた和文体、すなわち漢語を切り離れた和文のことを言う。日本の古典は『平家物語』のように漢語を多く取り入れたものがあるが、その一方で『伊勢物語』や『源氏物語』のような歌物語では、固有名詞を除けばほぼ全文が大和言葉(和文)でなっている。谷崎は、『源氏物語』の現代語訳という仕事を通じて、日本の古典に見る和語文が文章体としての精華であることを見抜き、饒舌となりがちな口語文を戒めているのである。要は、「文章体の精神を無視した口語体は、決して名文とは云われない」(30)のであり、口語を用いて実用的かつ芸術的な文章を書く際にも、伝統芸術としての日本語文語文、すなわち古典文(和文)の造詣が重要な要素となってくるということである。

さらに、谷崎は、表現されるものの中には言語で伝えることのできないものがあることに注目し、文語文の持つ「字面」や「音調」にも注意を喚起するように進めている。つまり、理解をより効果的に促進するために感覚に訴えようというのだ。谷崎は、「古典の持つ字面や音調の美しさも、[...]参考にすべきであると思います。[...]口語文といえども、文章の音楽的效果と視覚的效果とを全然無視してよいはずがありません。なぜなら、人に『分らせる』ためには、文字の形とか

音の調子とか云うことも、与って力があるからであります」(37) と言い、「読者の眼と耳とに訴えるあらゆる要素を利用して、表現の不足を補って差支えない」(38) と述べている。

さらに、『「分からせるように」書くためには、『記憶させるように』書くことが必要』(46) と述べ、「字面の美と音調の美とは単に読者の記憶を助けるのみでなく、実は理解を補うのである」(47) と言う。そして、分からせるために冗長な表現を使うのはかえって間違いであり、むしろ「言葉の不完全なところを字面や音調で補ってこそ、立派な文章であると云える」(47) と考えている。ここから、

古典の文章はこの感覚的要素を多分に備えているのでありますから、われわれは大いに古典を研究して、その長所を学ばなければなりません。また、和歌や俳句等も、この意味において非常に参考になるのであります。もともと韻文というものは字面と音調とに依って生きていますのでありますから、これこそ国文の粹とも申すべきもので、散文を作る上にもその精神を取り入れることが肝要。(48)

という主張につながってくる。

もちろん、伝えるべき内容が無いにもかかわらず、視覚的効果(字面)や聴覚的効果(音調)のみによって文章を芸術の域に到達させることを言っているのではない。そうではなく、言語による表現の限界を知り、つまり、ただ多く述べることに終始することを止め、字面や音調といった感覚的要素を取り入れて、より効果的な表現を試みることを主張しているのだ。いずれにしても、この主張は「分からせる」ことを至上の文章術とした谷崎の芸術観から来る発想であることには間違いない。

4. 西洋の文章と日本の文章

以上見てきた谷崎の言語観や文章観のエッセンスは、谷崎があくまでも日本語を使って創作活動を行う芸術家であるという点に由来するものであろう。そして、まさにこの視点に立って西洋と日本の文章比較を行っている。

まず、西洋語と日本語の比較の総論として「言語学的に全く系統を異にする二つの国の文章の間には、永久の踰ゆるべからざる垣がある」(51) と指摘し、明治以降、何かと西洋の文物を学び続けた日本ではあったが、文章作法に関しては「彼〔西洋文〕の長所を取り入れることよりも、取り入れすぎたために生じた混乱を整理する方が、急務ではないか」(52) と述べている。つまり、日本語の持つ本来の特質を熟考した上で、西洋から無理に取り入れたものは是非を再考せよという主張である。

ここで谷崎は、日本語の持つ特質として、「われわれの国語の欠点の一つは、言葉の数が少いと云う点」(53)、すなわち語彙が少ない点を指摘している。「まわる」という言葉を例に挙げ、それ自身が「まわる」のも、何かの周囲を「まわる」のも、日本語(大和言葉)では同じ「まわる」となるが、漢字では「転、旋、回、周」等のような字の使い分けで意味を微妙に区別することができる」と指摘する。

日本語は、こういった漢字の特徴を上手く取り入れて、読み方はすべて「まわる」と同じでも、「回る」「周る」と漢字を使用することで意味を限定してきた。その意味で、漢字の使用をむやみに制限する政策は愚かなことであろう(呉, 1999)。その反面、外来語を取り入れすぎた弊害もある。谷崎は「漢語の上に西洋語、翻訳語までを加えて、われわれの国語は俄かに語彙が豊富になりましたが、[...]あまりにも言葉の力を頼り過ぎ、おしゃべりになり過ぎて、沈黙の効果を忘れる」(55) ように、日本語の持つ本来の姿を失いつつあると言う。

では、なぜ日本語には語彙が少なくてすむのだろうか。その理由を谷崎は次のように述べている。

国語と云うものは国民性と切っても切れない関係にあるのでありまして、日本語の語彙が乏しいことは、必ずしも我等の文化が西洋や支那に劣っていると云う意味ではありません。それよりもむしろ、我等の国民性がおしゃべりでない証拠であります。[...] 古来支那や西洋には雄弁を以て聞えた偉人がありますが、日本の歴史にはまず見当たらない[...] 我等は昔から能弁の人を軽蔑する風があった。(55-56)

簡単に言えば、日本人は生来寡黙であるがゆえに、意志伝達にも多くの言葉を必要としないということである。確かに、谷崎が言うように、日本人は雄弁をそれほど美德とはせず、むしろ言葉巧みな人を軽蔑するような風潮さえある。このような日本人の性格から、「われわれの国語がおしゃべりに適しないように発達したのも、偶然ではない」(57) という結論にもうなずける。

日本人は事細かに言葉で表現するのを得意としないことは一般的に認められる事象であろう。つまり、言わないでも分かるようなことは、なるべく言わないで済ませてしまうことの方を好む。それは、詳しく述べることで内容がはっきりと伝わることよりも、逆に、それだけ意味が限られ、また余韻も薄れてしまうことを恐れるからである。できるだけ蔭の部分を残しておいて、相手に想像の余地を残しておく。西洋人から見ると日本語の表現には論理的に曖昧な点が多いという印象を与えるのかもしれないが、日本語で暮らす限りにおいては十分それで間に合っている。逆に、ソクラテスの対話編などに出てくる実に多弁な西洋の偉人などは、日本人にとっては閉口するとまでは行かなくとも、敬して遠ざけるといったところであろう。

上記の引用からも、谷崎が国語と国民性との密接な関係を肯定していることは読み取れるが、さらに「国語の長所短所と云うものは、かくの如くその国民性に深く根ざしを置いているのでありますから、国民性を変えないで、国語だけを改良しようとしても無理であります」(58) とまで言い切っている点は特筆すべきである。このように、国語(母国語)と国民性を結びつけて論じることは、先にあげたHumboldt系の言語学者の特徴として見られるものの、この言語理論は必ずしも近代言語学の本流的な考えとはいいがたい。それゆえ、なおさら谷崎の言語観の特異性が際立ってくる。

谷崎は、言語学者のように科学的視点から言語の一般的な特質を考察しているのではなく、あくまでも「日本人が話す日本語」という目線から日本語を論じているのである。そして、西洋の文章(谷崎は英文を例に挙げている)と日本の文章の比較から、

原文[日本文]の方は、云わないでも分かっていることは成るべく云わないで済ませるようにし、英文の方は、分り切っていることでもなお一層分らせるようにしています。[...]英文のように云ってしまえば、はっきりはしますけれどもそれだけ意味が限られて、浅いものになります(66)。

という結論に達する。

このような対照言語学的視点、比較文化論的視点を交えた言語論へと発展するのは、谷崎が、抽象的な意味における「言語(一般言語)」の本質を探求しようとする言語学者のように、言語を彼岸にある対象として研究分析しようとするのではなく、日本語という具体的個別的言語の中に身をおき、その言葉を使って創造を行う芸術家であるがゆえであろう。つまり、谷崎の言語論・日本語論は、科学者としてのそれではなく、言葉を使った芸術である文学者、言葉によって作品を作り出す作家ならではの芸術的言語論・日本語論と言えるのではないか。谷崎の「国語と云うものは国民性と切っても切れない関係にある」との主張は、言葉を使ってクリエイティブに生きている人から出てくる素直な考えではないだろうか。

谷崎は、前書きで、この『文章読本』においては「日本人が日本語の文章を書く心得」を記すといっている。繰り返すが、言語学者のように言葉を冷めた事実として研究の対象とし、そこから「言葉を」学ぼうとするのではなく、言葉と人間を切り離すことなく常に一体と考え、現実に使われている言葉とともに生き、「言葉に」学ぶ文人の視点から生ずるものなのであろうと考える。

本章の最後に、

自分の国の国語を以て発表するのに不向きなような学問は、結局借り物の学問であって、ほんとうに自分の国のものとは云えない。されば、早晚われわれはわれわれ自身の国民性や歴史にかなう文化の様式を創造すべきでありましょう。[...]時代はもはや我等が文化の先頭に立って独創力を働かすべき機運に達しているのである。故に今後はいたずらに彼等[西洋人]の模倣をせず、彼等から学び得たことを、

何とかして東洋の伝統的精神に融合させつゝ、新しい道を切り開かねばなりません(71)。

と述べているが、この言は明治人の気概を示しているとも見ることもでき、あるいは谷崎の愛国心の発露であるとも思える。

言語を民族の統一の原理とし、言語と国民性と結びつけ、言語をもって国民(民族)の研究の始まりとするのは、19世紀ドイツの文献学者らに共通する視点であるが、それは、谷崎と同じく、愛国心・郷土愛——あるいは、民族を愛する心といってもよい——から出発している(江藤, 2001)。そして、「語彙が貧弱で構造が不完全な国語には、一方においてその欠陥を補うに足る十分な長所があることを知り、それを生かすようにしなければなりません」(72)とは、日本語、日本人、そして日本文化に対する愛情から発された叱咤激励の言葉として受け止めたい。

おわりに

以上、『文章読本』の記述内容から、谷崎の言語観、そして日本語観を概観し、その内容を分析した。ここから見いだすことのできる、とりわけ興味深い谷崎の言語論の特徴は次の点である。

1) 言語を意志伝達の手段のみならず、思想の鑄型としてもとらえ、それ故に国語と国民性の不可分性を主張している。これは、「言語はエルゴン(完成した作品)ではなくエネルギー(絶え間ない創造・行為)である」とするHumboldtの主張につながるものであり(Humboldt, 1836)、言語構造はそれを話す人々の認識や思考に影響を与えるという言語相対主義を示している。

このように、谷崎の言語観がHumboldtの言語観のエッセンスと一致するのは、谷崎が芸術家の視点から、言語を単なる「作品(エルゴン)」として見るのではなく、文学作品創造の源である「活力(エネルギー)」として考えているからであろう。

2) 言語による伝達の限界を知り、言語万能主義を廃するところに、谷崎の日本的余韻や曖昧さへの尊重を

感じる。その意味で、西洋的な、いわゆるlogocentric(ロゴス中心主義)な言語観とは異にしている。つまり、欧米的な発想を離れた日本的な視点からの言語論・国語論を展開しており、それ故に、母国語である日本語を離れた抽象的な言語論ではなく、日本語の特徴を踏まえたうえでの言語論と言えよう。

3) 文章で書かれたものを言語表現の精華としており、「言語と文章は同じ」と主張する。これは、現代の言語学者が一般に言う「言語は音声である」という定義と対比すると興味深い。

4) 谷崎の言う「実用」とは、「思想を正確に伝える」ということであり、その意味で意志や思想を正しく相手に伝えるという言語のart面が強調されている(江藤, 2002)。そのart面には、文語文の効用から、字面や音調も含まれ、「分からせる(正確に伝える)」ためには「記憶させるように」書くと主張する点がいかに文学者らしい。

このように、『文章読本』に見る谷崎の言語観は、いわゆる一般言語学から見た言語論ではなく、言葉を使う芸術を創作する文学者の芸術的言語論といえる。その文人としての立場から言語の特質を見た言語観をベースにして、『文章読本』では、日本語の特質から日本人が文章を書くための心得を述べているのである。その意味で、言語を科学的研究の対象とし、その一般的な本質を考察しようとするのではなく、あくまでも一個の具体的な国語の特質を論じ、さらに、言語の本質的論考と切り離すことのできないその国語を話す人々の特徴についての考察をも加えているのである。

参考文献

- 江藤裕之(2001): 十九世紀ドイツフィロロギの究極的関心: logosからからeodへ. 渡部昇一先生古希記念論文集. 大修館, 東京, 167-179.
- 江藤裕之(2002): 英文法におけるart vs. science. 長野県看護大学紀要, 4, 1-9.
- Humboldt Wv (1836): *Über die Verschiedenheit des menschlichen Sprachbaues und ihren Einfluß auf die geistige Entwicklung des*

Menschengeschlechts. Dümmler, Berlin [Facsimile
repr. ed. 1960, Dümmler]

井上ひさし (1984): 自家製文章読本. 新潮社, 東京.

丸谷才一 (1977): 文章読本. 中央公論社, 東京.

三島由紀夫 (1959): 文章読本. 中央公論社, 東京.

向井敏 (1988): 文章読本. 文芸春秋, 東京.

中村真一郎 (1975): 文章読本. 文化出版局, 東京.

呉善花 (1999): ハングル漬けが韓国をダメにした.
中央公論, 平成11年6月号, 118-125.

Robins RH (1997): *A Short History of Linguistics*.
Longman, London. [1st ed. 1967]

谷崎潤一郎 (2002): 文章読本. 中央公論社, 東京.
[初版, 1934年]

渡部昇一 (1973): 言語と民族の起源について. 大修
館, 東京.

【Summary】

Jun'ichiro Tanizaki's View of Language Seen in His *Bunsho-dokuhon*, or *Reader for Good Writing*

Hiroyuki ETO

Nagano College of Nursing

Jun'ichiro Tanizaki's (1886-1965) *Bunsho-dokuhon* (1934), or *A Reader for Good Writing*, is an essential material to interpret both his view of language in general and of the Japanese language in particular. Contrary to its title that reminds us of a writing manual for the general use, this book indicates no specific rules for writing or publication, but shows his stylistic theory based on his view of language. The distinctive feature of Tanizaki's view of language is that he regards language not simply as a tool of communication, but as a means of thought, and that he insists on inseparability of a language and a nation that speaks it. This attitude to language is identical with Wilhelm von Humboldt's perception of language which claims that the structure of language acts on ways of thinking of people who speak the language. In addition, Tanizaki, from the viewpoint of a Japanese man of letters, abolishes the Western "logocentric" ideas and emphasizes creative spheres of language to convey ideas with accuracy. Tanizaki's view of language seen in his *Bunsho-dokuhon*, or *A Reader for Good Writing*, can be regarded, therefore, not as that of linguists who treat language as a mere object of their research, but as that of litterateurs, or artists, who create aesthetic works with the miraculous power of words.

Key words: Jun'ichiro Tanizaki, *Bunsho-dokuhon*, stylistics, aesthetic view of language,
Wilhelm von Humboldt.

江藤裕之 (えとう ひろゆき)
〒399-4117 駒ヶ根市赤穂1694 長野県看護大学
0265-81-5138 (Fax 兼)
Hiroyuki ETO
Nagano College of Nursing
1694 Akaho, Komagane, 399-4117 Japan
e-mail: heto@nagano-nurs.ac.jp